諏訪小だより

令和４年６月３０日
７月号
多摩市立諏訪小学校
校長　齋藤　幸之介

言葉－励ましを受けたことから

校長　齋藤幸之介

過日実施いたしました学校公開に際しましては、保護者や御家族の方々に多数御参観いただきましたことに改めて御礼申し上げます。併せて、多くの方々にアンケートをお寄せいただきましたことに感謝を申し上げます。公開予定の伝え方、実施した学習活動のあり方、会場の設定など、多岐に亘る御意見を頂戴しました。コロナ禍であることを踏まえつつ、さらに改善できる点を探ってまいりたいと思います。

励まされること

そんな中、次のような御意見を頂戴いたしました。

「大人がわかりきっていることを小さな子に教えるのは時間がかかりますが、教える技術をみせていただきました。」

私共はかねてより、「Festina Lente」と言い、「ゆっくり急げ」を念頭に置いて取り組んでいます。効率化が求められる昨今にありながら、子供たち一人一人の成長の仕方に添いながら、焦らずに取り組もう、と考えています。しかし、一方で限られた時間内で成果を上げることも私共の使命、と考えるならば、正直気持ちが揺れることも少なくありません。

ですので、御紹介をした御意見を頂戴したときには、深く感謝をしたとともに、さらに前進していこう、という強い気持ちをもつことができました。

そして、言葉のもつ力、もっと言えば魔法のような力に気付くことができました。

子供たちが言葉を自分のものにすること

言葉には、例えば、「これはりんご」や「あれはいちご」などと物を明らかにする働き、同時に「赤くて丸いりんご」「やや黄緑がかっていて少し長細いりんご」などと区別するはたらき、そしてものだけでなく人の思いや考えを理解するための働きがある、と捉えることができます。

また、言葉は、単に音だけで子供たちの中に身に付けられるものではなく、関わる人が大きな影響を与えます。例えば、親と感情を共有したり、その時々の周囲の様子を共に感じたりすることが基になる、ということです。かつて私を御指導くださった先達から「言葉がまだ豊かに発せられない幼児には、例えばきれいな花を摘んで見せにきたときに「きれいだね」と伝えながら、「快」の言葉を伝えることが大切」と学びました。

しかし、年齢を重ねるに従って言葉による活動を活発に行って言語能力を伸ばしていく一方で、「うつろな」、つまり中身がなくてむなしさすら感じる言葉がとびかうことによって人間が疎外される、という指摘もあります。このことが、例えば今から４０年以上も前に言われていたことに驚きます。そして、改めて教育の大切さを感じるところでもありますが、いかがでしょうか。

言葉で伝え、言葉を受け止めるために

今号で研究主任　齊藤翔太教諭も紹介しておりますが、本校では朝学習の時間を活用して「ことばタイム」に取り組んでいます。各学年の発達や学習経験に応じて「考えや気持ちを伝える言葉」を学んでいます。「ほっとする」「さっぱりする」「気に入る」といった言葉が教室から聞かれます。単に意味を明らかにするだけでなく、文を作成しながら言葉のもつイメージなどをつかみ、相手にどのように伝わるのかを考えます。少しずつ語彙を増やしながら、自分の思いや願いを伝えられるようにすること、また例えば文学作品等を読む際には特に大切になる言葉を確実に味わいながら読み深めていくことに繋げていきたいと考えています。

そして、何より、互いが快い気持ちになれるよう、相手を励ます言葉を使える子になってほしい、と改めて思っています。

＜参考＞
岡本夏木「子どもとことば」（1982 年、岩波新書）